

令和4年度 多摩市文化芸術ビジョン検討委員会 第2回 要点録

開催日時・場所	令和4年11月30日(水) 18:00~20:00 多摩市役所301会議室	
参加委員	参加委員7名 学識経験者：伊藤裕夫氏 市民委員：石坂氏、岩佐氏、柴田氏、新倉氏、西村氏、渡辺氏	
出席職員	くらしと文化部長、文化施策担当課長、事務局3名	
主な内容	開会	資料の確認
	次第1	前回の振り返り
	次第2	文化芸術を取り巻く社会情勢の変化・多摩市の変化について
	次第3	(仮称)多摩市文化芸術将来ビジョンの柱・街・市民について
	次第4	アンケート内容について
	次第5	ワークショップについて
	次第6	第3回委員会について
議題	主な意見(●事務局、◎委員長、○委員)	
次第1 前回の振り返り	<p>①前回の要点録について確認。委員会として承認した。</p> <p>②前回の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本委員会の趣旨・概要・会全体の流れを確認 ・事務局案である、(仮称)多摩市文化芸術将来ビジョンの説明をし、10年後を見据えた社会情勢の変化や多摩市の変化について、委員から意見を言っていた 	
次第2 文化芸術を取り巻く社会情勢の変化・多摩市の変化について	<p>●事務局 資料7「文化芸術を取り巻く今後の社会情勢や多摩市の状況変化について」を説明</p> <p>○技術革新による文化芸術の進展に関して、仕事柄、VRやARを観に行く機会が多くなった。さもそこにいるかのように思える高度な技術であり、複数の人が話せる技術もできてきている。まだ値段は高く一般的ではないが、今後さらに進化し広まってくれば、文化芸術の発信のあり方が変わってくるのではないかと。リアルな発信だけでなく、オンライン配信という方法も増えてくるのではないかと。</p> <p>○ベルリン・フィルはコンサートをオンラインで発信しており、YouTubeでは、世界の様々な劇団・楽団・オーケストラ・バレエ団等の活動を観ることができる。コロナ禍でオンラインを活用する団体が増えたことが大きな要因と考えられる。</p> <p>○市民文化祭を行うにあたり、物価高が響いてきている。材料が高騰しており、予算の範囲内で作品等を作ることができなくなっている。</p> <p>また、展覧会や舞台等をやるにしても、感染症対策で必要なものが出てきており、対応も団体によって全く違う。コロナ禍の影響はしばらく続くと予想され、先が読めないでいる。</p> <p>カメラマンと話す機会があったが、新しいカメラを購入したくても半導体自体が供給されず、手に入らない。中古は故障しても、備品が足りず直せない。</p> <p>○10年後は、デジタル通貨が広まっていることが予測され、交通も自動運転に変わってきていると思う。そうすると、鑑賞の場に足を運ぶ億劫さがなくなっていく。</p> <p>また、文化芸術は、「仮想空間で好きな所へ行くこと」、「実態ありきのもの」の2つに分かれていくのではないかと。</p>	

次第2
文化芸術を取り巻く社会情勢の変化・多摩市の変化について

○子どものころ、アニメや映像の中で宇宙食が流行った。チューブに入っていて、これさえあれば栄養摂取ができ、料理の手間も省け、とても便利なのがこれからの未来にできるとされていた。しかし、半世紀経った今もそうになっていない。あのお店がおいしいと評判があれば外食しているし、様々な素材で料理している。

バーチャルなものが進めば進むほど、実際にあるものが必要とされてくるのではないか。コロナ禍で劇場等での鑑賞が制限され、その後鑑賞できるようになった時の感動が大きかった。これからの文化芸術は、バーチャルとリアルに2つに分かれていくが、リアルなものが廃れることはなく、むしろ重視されていくのではないか。

◎街を構成しているのは、人と人との関係だと考える。10年後の多摩市の変化について、市民目線で意見はどうか。

○世の中がどんどん便利になり、時間に余裕ができてくる。そうすると、文化芸術に時間を割く以外にすることがなくなってくるのではないか。ただし、便利になった分、自分と共通点があるなどの好きな人としか出会わない時代になるのではないか。子どもは特に知識がないため、特定のことにしか知る機会がないのは恐ろしいことだと思う。

街のあるべき姿としては、文化芸術でいろいろな人と交流する機会を作っていくことが良いのではないか。

◎現在の多摩市は多摩ニュータウンがコアと見ることもできるが、今後、環境問題の点から考えれば、多摩川沿いなど自然を中心に考えることもできる。

また、人と人との繋がりをコアとして見ると、オンラインは関心のある人とのみ繋がることができ、リアルでは様々な人に出会うきっかけを作ることができる。市民としての委員の意見はどうか。

○多摩市は緑が多く、整備された公園が随所にあり、活用すべきものである。そこでの活用とは、外国や地方の方と交流を育むような方法もある。

○ここ10数年で、国内では街や田園を舞台にした文化芸術活動が増えている。パルテノン多摩だけでなく、もっと屋外で野外コンサートや展示会を実施する方法もある。

○先日、原峰公園で行われていた野外展覧会に行ってきた。とても素敵な展覧会だった。何年も続いている展覧会らしいが、多摩ニュータウン地域と既存地域との交流が浅いため、今回初めて知った。夏休みに、多摩川河川敷では、子どもたちが演劇体験をして発表する取組も行われている。多摩市内では、色々な場所で、多くの人知らないまま、様々な事業が実施されているし、されてきた。こういった事業をもっと知る機会があると良い。

多摩ニュータウン開発時は何も無い中から、子育てや文化のサークルを作っていた。しかし、その団体がなくなってしまった。ただ、最近では30代~40代の方が新たにサークルを立ち上げ始めており、萌芽が見えてきているため、広がってほしい。

○海でも、民家でも、パブリックアートは場所を選ばずにできるものだと思う。それを実現しているのが、大地の芸術祭。文化芸術は、やり方次第、知恵次第で何でもできる。もちろん、パワーも必要であるし、一定のお金もかかるが、1度作ってしまえば人の回遊が始まる。

次第3

(仮称)多摩市文化
芸術将来ビジョン
の柱・街・市民につ
いて

○図で説明してはどうか。たとえば、妊婦、赤ちゃん、小学生、中学生、高校生、大学生、大人、高齢者、移住者、家族単位、ビジネスマン、外国人、障がい者など、「市民」に当てはまる人をイラストで示し、それぞれの人がどういった文化芸術の機会があるのか説明できると良い。日常に文化芸術をどう絡めていくのを見える化すると、道筋を組み立てやすい。

多摩市の文化芸術に親しみをもてるように、医療と文化芸術、農業と文化芸術を繋いでいく、ということができないか。

○市民で写真を撮る人や絵を描く人は多い。しかし、展示や発表は躊躇してしまう。チラシで「こういう展示会ありますよ、応募しませんか」と周知しても集まらない。「人」を介した後押しが大事であり、そういった中間的な支援が必要ではないか。

別の話になるが、先程、文化芸術と農業の話が出たが、稲城の展覧会は特産である梨が飾ってあり、面白かった。多摩市にはそういった取り組みはできないのか。

○活動の場と表現活動の担い手、表現活動の担い手同士などを繋げる、見つける、そしてチャンスを作っていく役割は大切である。自分自身が主役になるのではなく、街と市民の間に中間支援の人や団体、仕組みを作りたいと個人的に思っている。

○発表できる場が近くにあり、すぐにできる状況があると楽しいのではないか。

授業で、学生に好きな紙芝居を選んでもらい、即興でやってもらった。決して上手い話し方ではなかったが、「紙芝居から元気をもらった」との感想が多かった。発表者が発表して、鑑賞者から拍手をもらう。その内容がプロ並みでなかったとしても、何か鑑賞者に響くものがあり、発表者も発表したことの達成感や鑑賞者からの感想をもらって何かを得る。そういう場が大切であることに気づき、街にたくさんあると良いのではないか。

医療と文化芸術の繋がりについて、ある病院では、アマチュアの方が生演奏をしてくれて、花が飾ってあり、絵も飾ってあった。素晴らしかった。入院という経験が、文化芸術に触れる経験となった。文化芸術には、いろんな可能性がある。

○大人にとっても鑑賞に特化しないで、参加・体験を強調してほしい。資料9にある将来ビジョンの柱について、「本格的な」という表現ではなく、「多様な」や「幅広く」を使ってはどうか。文化芸術は、何がダメというものではないため、「本格的な」を使うと、本格的ではない文化芸術が排除されてしまうイメージとなる。

○「豊かな」という表現でも良いのではないか。「本格的な」という表現は、文化芸術のイメージとかけ離れている。

○資料9にある「市民の姿」で「市民は、自分たちの街は自分たちできれいにしていくという意識が芽生えている」とあるが、話の前後が切り取られているため、「きれい」ではなく、「楽しくしていく」が良いのではないか。

次第3
(仮称)多摩市文化芸術将来ビジョンの柱・街・市民について

○たしかに他の文章とは毛色が違うが、それが良いと考えている。ヨーロッパなど街自体がきれいな所は、街づくりが全体として考えられていて、かつ、文化芸術が栄えている所が多い印象がある。どう表現するかは別として、「街がきれい」という観点は大事である。

○「街のにぎわい」について、人が集まっていれば賑わっていると言っているのか。そこに集まっている人たちが、その街を大事に思っているかどうか、お互いがお互いに思い合っているかどうかではないか。街や人を愛している人をどう増やすか。「自分はこうしたいけど、一緒にやろう」「あなたがそうしたいなら、そうしよう」という街が賑わいだと思う。そいといった部分が表現できれば良いと思う。

○地域にインフルエンサーがたくさんいると良い。社会的に成功している人が運を招くためゴミ拾いを自らやっていたりするので、そういう憧れの対象の人がお手本となり、気軽に始められる仕組みがいい。

○望ましい行動をとれるよう、人を後押しするアプローチすることができるのではないかと。人が意思決定する際の環境をデザインすることで、自発的な行動変容を促すことである、例えば街にゴミ箱を2つ置いて、「あなたは〇〇と〇〇のどちらが好きか？」と質問し投票させる仕組みを行ったら、その場のゴミが減ったとの事例があった。そういったちょっとした仕掛けで、人が楽しく、無意識にやっていく仕組みをたくさん作れると良い。

○行政主導というよりは、市民から提案していくボトムアップ型でないと長続きしないのではないかと。

○言葉で「それはだめだ」「そうしない」ではなく、ピクトグラムで、一目で誰もが分かりやすいもので始められたら良いのではないかと。

○以前の話だが、学生がコミュニケーションという、おしゃべりしながらゴミ拾いをする活動を始めた。次第に市民も参加するようになった。話の中で、街について語り合う機会も増えていった。徐々に広がったが3年近くでつぶれてしまい残念だった。

◎多摩市は元気な高齢者が多いと聞くと、街の活性化に寄与してもらう方法はないか。コロナ禍から在宅勤務をする方が増え、昼間人口が増えたのではないかと。そういった人たちで何かできないか。

○高齢者は時間に余裕がある方が多い。自身が得意なこと、例えば囲碁を子どもたちに放課後に教え、教え子がプロまで育ったという話もある。高齢者が子どもたちに文化やスポーツを教えていること自体が生きがいになっていくと、良い循環が生まれていく。

○核家族が増えて、おじいちゃんおばあちゃんに会えない子もいる中で、地域の高齢者と触れ合える需要は多い。フランスでは数十年前にパリでお年寄りの孤独死をきっかけに1人の青年が始めた小さなパーティー「隣人祭り」

次第3
(仮称)多摩市文化芸術将来ビジョンの柱・街・市民について

というものがある。椅子やテーブルをもってきて、みんなで食事をするというものだが、住民同士が顔見知りになり、親しくなることで、隣人同士助け合うことができるようになった。

○小さな小さなネットワークを大事にし、それを人々が気軽に選べ、ゼロから準備して何かをやるのではなく、既存の団体で様々なことを開催できると良い。

地域新聞をみると、いろいろな催しが開催されている。初めて知る催しも多く、この新聞を見なければ知らなかったなと思う。また、見たからと言っても、実際に行くことは少ない。そういう意味で紙面上だと限界がある。ユーチューバーなどのインフルエンサーが動画で周知したり、開催したいイベントをマンションごとで申請し行政が支援するなど、「気軽さ」をもっと工夫したい。

○住んでいる市の広報紙を読むが、良い講座がたくさんある。しかし、内容が60代以上をターゲットにしているようなものが多い。小さい単位でもうちょっと幅広い年齢層に、幅広いコンテンツで届けられないか。

◎広報手段は重要だが、紙の広報誌とインターネットの中間的なものがない。市内で、広報ツールの専門性をもった人の力を借りることはできないのか。

○コンテンツを作ることが長けている人、メディア発信することに長けている人など、市内にいるのではないか。

○何のためにやるかのコンセプトをわかりやすい言葉と希望の持てる中身で共有できれば良いのではないか。

○そういったことを考えるコピーライターを得意とする人もきっといる。委員会で議論するより、そういった方々へ依頼してはどうか。

○パルテノン多摩で展示をした。今までは、絵画や写真を扱っており、名称を「市民美術作品展」としていたが、どうやったらもっと他の人に参加してもらえるか考え、今回は「市民作品展」に変更した。展示内容も折り紙などの手作業の作品も参加できるようにした。そうしたら、幅広い層に作品を見てもらえることができた。これまで交流の無かった絵画・写真の人たちと、手作り作家の交流を作るきっかけとなった。

また、集客については、手作り作家の人たちにハガキを送った所、主婦層のネットワークで口コミというアナログ的情報発信で、かなりの人を集めることができた。周知もアナログな方法無くすのではなく、併用していくことが大切だと感じた。

○多摩市は、コロナ禍の中、2年間市民文化祭を開催した。他市は休む、またはオンライン上のみで対応した所が多かった。そのため、他市から「どうやって開催したのか」と問い合わせがあり、交流することができた。コロナのおかげで他市とつながった。

次第3
(仮称)多摩市文化芸術将来ビジョンの柱・街・市民について

○駅ごとにピアノを置くなど、拠点ごとにその場その場に相応しい、面白いシンボルがあると良いのではないかな。

○新幹線の浜松駅ではヤマハと河合が交代で、スペースをとって演奏できるようにしている。ピアノでも、電子ピアノなど音を調整する等、工夫すれば可能ではないか。街に大きなキャンパスがあり、自由に書いていいなどの工夫もある。

○そこにファシリテートしてくれるプロのアーティストがいれば良いと思う。

○全体をディレクションしてくれる人も大事。これから団地が古くなる、空き家が増えるのであれば、価値が下がっていくのをそのままにするのではなく、価値あるものに変えていくようなアーティストを連れてくる方法もある。

大分県に「昭和の街」と呼ばれる場所がある。そこは倉庫を改造し、昭和のものを集め、まるで昭和に戻ったかのような感覚になる商店街となっている。年間約30万人の来訪者がいる。一から作る文化芸術で盛り上げるのも良いし、古きもので盛り上げるのも良い。文化芸術は「こうあるべき」というものではない。

○多摩ふるさと資料館に多摩地域の古いものが置いてあるが、コンセプトがわからないため、もっと数を増やして色々なものを置くべき。

○多摩市みんなの文化芸術条例にあるが、年齢や性別、社会的背景などに関わらず、文化に触れにくい人たち、例えば仕事や育児で時間がない、お金がない、といった人たちに届ける仕組みが考えられているという観点は抑えておきたい。

文化芸術を享受できる人がいつも限られている状況は好ましくない。もっと積極的に仕組みとして作っていききたい。アウトリーチで出かけていくなど方法がある。

○きらり富士見では文化芸術の分野で先進的な活動をしていたが、市民の参加が少なかったことが調査でわかった。そこで、農業が盛んという市の特徴を生かし、文化施設で収穫祭を開いたり、バザーをしたり、これまでやらなかったサーカスを一緒にやるなど、これまで文化に触れなかった人が足を運ぶ仕掛けを行ったという事例がある。多摩市内20カ所くらいで集中して行う文化芸術祭も面白いのではないかな。

○資料9の街の姿で、「文化芸術の敷居を低くする」とあるが、低くするのではなく、そもそも敷居が高いものではない、という考え方にしたい。

高齢化が進んでおり、クラシック業界ではコロナ禍で高齢者は外に出づらくなり、会場に来る人が少なくなっている状況がある。チケットを購入してくれても、コロナ感染者が増えるなどでキャンセルし、そのまま戻ってこなくなると聞いている。また、足腰が悪くなる高齢者が劇場に足を運びやすい工夫が必要である。そういった高齢者は自分で運転することもできにくくな

<p>次第3 （仮称）多摩市文化芸術将来ビジョンの柱・街・市民について</p>	<p>っている。何か工夫はできないか。</p> <p>鑑賞方法が2極化するという話について、配信は多様な文化芸術が触れやすくなり、踏み出しやすくなる一方で、質の確保が出来るのかが心配である。伝統的な演奏を守っていくことと、新たなことを挑戦することが大切である。</p> <p>○配信は、いくらでも簡易的な文化芸術を広げることができる。決して排除する訳ではないが、本物を広くみせるとみんなが感化され、本物に慣れてくる。長い目でみると、質の高い文化芸術が広がっていく方が良いのではないか。</p> <p>◎オンライン配信は簡単に本物も聞けるが、地域とのつながりはない。そこにも注意し、配信とその場で享受する文化芸術の兼ね合いをどうしていくか。</p> <p>○学校、病院等で文化芸術を繋げいくことが大事だと感じる。ある病院で演奏したことがあるが、その後、別の会場で演奏していた時「病院の演奏を聴いて勇気をもらって翌日の手術を頑張れた」と言ってもらえた。文化芸術にはそういった力があるし、学校や病院で演奏する機会が大切だと感じた。</p> <p>○プロのアーティストが市内の様々な場所に出向くことが出来るよう、クラウドファンディングで資金を集めるなどして実現できないか。</p> <p>○文化振興財団はパルテノン多摩を運営するだけの団体ではなく、多摩市の文化芸術を振興する団体であると思っている。文化振興財団がディレクションの機能をもって、プロのアーティストを病院や学校などに派遣するような事業を行うことはできないのか。市から予算を使い、予算が足りないならクラウドファンディング等を行って活動していくべきである。文化振興財団は、ディレクションができる人材がいるべきであるし、市民が持っているノウハウを生かし、文化芸術活動で発揮できるよう育成していくのが仕事ではないか。</p> <p>文化事業の評価に関する本を読んでいるが、収支だけでなく、定性的な評価をして、反省点があったとしても次はこうしようと積み上がっていく街にしたい。</p> <p>◎最近、小規模な自治体でも地域版アーツカウンシルが模索されている。それが人材の供給元になったり、情報提供元になったりしている。こういった仕組みも検討していきたい。実現していくために何が必要かの視点も含め、構造を考えていきたい。</p>
<p>次第4 アンケートについて</p>	<p>事務局 資料10 アンケート（案）について説明</p> <p>○文化芸術の範囲について、明記した方が答えやすいのではないか。</p> <p>○資料にある収集数が50とあるが、500くらいないとサンプル数として客観性が乏しくなるのではないか。</p>
<p>次第5 ワークショップについて</p>	<p>事務局 資料11 ワークショップ（案）について説明</p>
<p>次第6 第3回委員会について</p>	<p>日時：令和4年12月21日（水）18時～20時 場所：多摩市役所301会議室 内容：将来ビジョンの内容について</p>

